

# 同一視と共感がヒトの発達において果たす役割について

## The Roles of Identification and Empathy in Human Development

登張真穂\*

Maine TOBARI

要旨：最初に、同一視についての文献と研究をもとに、同一視がヒトの発達にどのような役割を果たすのかについて考察した。また、共感についての臨床心理学と発達心理学における理論と研究をもとに、共感がヒトの発達にどのような役割を果たすのかについて検討した。同一視はヒトの発達において重要な役割を果たすが、必ずしも成長につながらない場合もあると考察された。共感については、臨床家のコフトとロジャーズは、親やセラピストの共感がヒトの発達に重要な役割を果たすことやそのプロセスを論じている。社会化の理論でも、親の共感が幼児期の子どもの発達に重要な役割を果たすことを指摘している。これらの理論をもとに行われた実証的研究からは、親の共感が子どものポジティブな能力の発達にプラスの影響を与えることが示唆された。同一視も共感も複合的な概念で、無意識の部分を含んでいる。ヒトの発達には、こうした意識しにくい心的メカニズムが重要な役割を果たすことが示唆された。

キーワード：同一視, 共感, ヒトの発達, コフト, ロジャーズ

### はじめに

登張（2021a）は、同一視についての精神分析理論や発達心理学等における研究と、共感についての道徳哲学や社会心理学、臨床心理学等における理論や研究に基づいて、同一視と共感との関連性について検討した。それによると、同一視と共感はともに、複数の見方を含む複合的な概念だが、この二つの概念、ないし現象は総体的に深く関連するものであることが明らかとなった。また、同一視と共感はともに、ヒトの発達に深くかかわることも示唆された。

登張（2021b）はさらに、発達心理学や臨床心理学、神経科学、動物心理学等幅広い領域における共感研究について文献研究を行い、共感の役割について検討した。

本研究では、これらの文献研究をもとに、さらに他の文献も読み加え、最初に、同一視がヒトの発達に果たす役割について検討する。共感については、臨床心理学と臨床心理学以外の心理学では、捉え方に少し違いがある。そのことを踏まえたうえで、まず、共感がヒトの発達にどのような役割を果たすのかについての臨床心理学の理論を紹介し、次に、共感がヒトの発達に果たす

---

\* とばり まいね 文教大学付属生活科学研究所客員研究員

役割について検討した発達心理学における研究について述べ、最後に全体的な考察を行う。

## 同一視がヒトの発達において果たす役割について

同一視は、S. フロイトが提唱した精神分析理論における重要概念の一つで、同一視の概念は発達心理学等の分野でも用いられている。同一視は、「親など重要他者のようになりたいと思い、同じようにふるまったり、その内面を内在化したりすること」というように定義されることが多い（登張，2021a）。このような同一視によって、ヒトはいろいろなことを身に付け、成長していくのであり、同一視がヒトの発達に大きな役割を果たすのは明らかである。ヒトは成長とともに、同一視の対象や内容を広げていくのであり、友人や教師、その他の人々、あるいは書物などからも学んで、成長を続けていくことになると考えられる。しかし、同一視の対象が発達的にみて好ましくない人物である場合もある。また、尊敬すべき人物に同一視する場合でも、同一視する側の問題で、内面の取入れを伴わない形だけの同一視である場合もあるし、誤った受け取り方、取り入れ方をして、同一視が必ずしも成長につながらない場合もあると考えられる。

こうした手本としての同一視の対象は、ロールモデルと呼ばれることもある。ロールモデルについては、学業における動機づけやキャリア発達などの分野の研究が多い。溝口・溝上（2020）は、人文・社会学系と国際系の学部の大學生を対象に、自分にとってのロールモデルを思い浮かべてもらい、その人が自分の職業や生き方・人生についてどのような影響を与えたかを自由記述で回答を求め、それをもとに、ロールモデル尺度の質問項目を作成した。さらに、大学での学びが職業に直結しやすい学部を除く学部の大學生を対象に調査を行い、ロールモデルの有無、ロールモデルのカテゴリー等についての質問と、ロールモデル尺度項目、キャリア・レディネス尺度、キャリア選択自己効力感尺度等への記入を求めた。ロールモデルが「いる」と答えた者は「いない」と答えた者よりやや少なかった。ロールモデルのカテゴリーは、両親、友だち、先輩、先生、芸能人・スポーツ選手などである。ロールモデルがいたと答えた者のデータを用いてロールモデル尺度の因子分析を行うと、尊敬・理想像、視野の広がり、支援・助言、行動の手本、回避の5因子が見出された。また、このデータをもとにロールモデルの類型化を行ったところ、漠然とした憧れのみを抱く「憧れタイプ」（回避が低い）と、個人が手本にして気づきを得ることができるような「師匠タイプ」（尊敬・理想像、視野の広がり、行動の手本が高く、回避が低い）、その人のようになりたくないと思うが、その人から支援や助言をもらい、手本にしようとする態度も少し見られる「反面教師タイプ」（支援・助言と回避がやや高い）、思い入れが多くないと考えられる「とりあえずタイプ」（尊敬・理想像、視野の広がり、支援・助言、行動の手本が低い）、正負両面を併せ持つ「統合タイプ」（尊敬・理想像、視野の広がり、支援・助言、行動の手本、回避のいずれも高い）の5タイプが確認され、キャリア・レディネスは「反面教師タイプ」が「とりあえずタイプ」より高く、キャリア選択自己効力感は概ね、「師匠タイプ」と「統合タイプ」と「反面教師タイプ」が「とりあえずタイプ」と「憧れタイプ」より高い傾向がみられた。この5タイプに、「ロールモデルがいない群」を加えた6群のキャリア・レディネス尺度等の得点を比較すると、キャリア・レディネスとキャリア選択自己効力感は概ね「師匠タイプ」と「統合タイプ」と「反面教師タイプ」が、「ロールモデルがいない群」より高い傾向がみられたが、「とりあえずタイプ」、「憧れタイプ」と「ロールモデルがいない群」との間には差がみられなかった（溝口・溝上，2021）。（そうなりたいたいと思うような）正のロールモデルか（そうなりたくないと思うような）

負のロールモデルかという対比ではなく、どちらのモデルであっても個人がモデルを参考にしたり助言をもらったりして何か気づきを得ようとする態度が重要であると考察された（溝口・溝上, 2020）。この研究からは、青年後期から成人初期における同一視の複雑な様相が示唆されるとともに、その在り方とキャリア発達との関連等が示された。

ただし、同一視にはこれとは異なる形態のものもある。発達初期や退行状態、集団状態に生じやすいと言われている融合や一体化のような同一視もある。精神分析家のベネディク（Benedek, 1959）によると、生まれたばかりの乳児は、自分の外側の世界と自分との境界にはっきりと気づいておらず、乳を与え、世話をしてくれる母親に同一視していく。一方で母親も、妊娠、乳汁分泌といった性サイクルを体験する間に、自分自身の乳児期を思い出して退行するとともに、母性を発揮するための生理的心的準備を進め、出生して自分の乳首を吸う乳児に共感し、同一視していくという。こうした親子の共生的融合的状態の中で、乳児は母親から乳汁をもらい、欲求を満たされ、抱かれ、世話され、安心感を得て、生理的・身体的・精神的成長の営みを続けていくと考えられる。母親もそれを楽しみ、子への愛情を感じ、応答的にかかわりを続けると、子の親への愛着も徐々に生まれ、それは子の発達、成長の基盤となっていこう。こうした発達初期の親子の融合的一体化の同一視は、子どもの発達にとって非常に重要な役割を果たすと言えるだろう。

子どもがどうしても泣きやまなくて、母親がイライラしたり、不安になったりしてうまくかみあわなくなることもあるだろうが、母子の周囲にいる父親や祖父母など周りの人が母子を温かく支えるなら（共感が働いていると考えられる）、母子はやがて危機を脱し、良いリズムが生まれるかもしれない。その後、子どもの自己が発達し、親子の関係が融合の状態ではなくなっても、親子の間に愛着という結びつきができていれば、何らかの形での同一視は存続し、親の子への愛情や励ましという形で子を温かく見守り支え、子どもの成長を育む基盤となるに違いない。ただし、融合的同一視の場合も、親が子どもの自由な発達を親が認めない、阻止するといったことがあると、子どもの発達に悪影響を及ぼすことになる可能性がある。

## 共感がヒトの発達において果たす役割についての臨床心理学の理論

共感、臨床心理学においても、社会心理学や発達心理学等、臨床心理学以外の心理学においても重要な概念である。どちらの分野でも、共感を表す英語として、現在はドイツ語の *Einfühlung* を語源とする *empathy* を用いるのが一般的となっている。*Einfühlung* はもともと美学の分野で用いられた用語だが、ドイツのリップス（Lipps, 1909 大協訳 1939）によって「他者の内面を認識する過程」という意味でも用いられるようになり、ティチェナー（Titchener, 1909）はこれを *empathy* と翻訳してアメリカ心理学界に伝えた。*Einfühlung* (*empathy*) については、フロイト（Freud, 1921 小此木訳 1970）も「自分とは異なる他者の内面を理解するのに重要な役割を果たす過程」として言及している。*empathy* の概念は当初、主に臨床心理学の分野で広く用いられるようになった。臨床家の中でも、*empathy* 概念を特に重視した精神分析家のコフトと、クライエント中心療法を提唱したロジャーズの理論では、共感がヒトの発達に及ぼす影響について扱っている。最初に、これらの理論を見ていくことにしよう。

コフトは、共感 (*empathy*) を代理的内省、あるいは、「ある人が客観的な観察者の立場を保持しながら同時にもう一人の人の内的人生を経験しようと試みること」と定義し（Kohut, 1984 本城・笠原監訳 1995, p.243）、子どもの初期の発達と自己愛パーソナリティ障害の治

療における共感の役割を強調した。コフト (Kohut, 1977 本城・笠原監訳 1995, p.67-70) によると、子どもが心理的に生き延びるためには、共感的に反応してくれる環境の中に生まれる必要がある。正常な環境の下では、母親は子どもの不安や緊張感、心理的欲求を共感的に感知し、子どもを抱き上げ、語りかけて、子どもが融合を体験できるようにする (そのような存在をコフトは自己対象と呼んだ)。すると、子どもは自己対象の高度に発達した心的組織に参加して融合し、接触や声の調子などで伝達される自己対象の感情状態を、あたかも自分自身のものであるかのように体験する。子どもは強い不安を感じたとき、まず (自己の) 増大する不安を、次に (自己対象の) 一定の穏やかな不安の信号、次に (自己対象の) 平穏さを感じ、母親が子どもの欲求を満足させ、世話する間に、子どもの心は精神的均衡を回復し、不安のない穏やかな心を獲得していく (不安の広がり→静謐へのシーケンス)。子ども時代にこの段階が至適に体験されると、それは生涯を通じての精神的健康の支柱の一つとなるが、自己対象の共感的共鳴が欠けていたり鈍かったりする場合、子どもは全能の自己対象と融合することができず、上記のシーケンスに参加できず、同じような方法で自分の不安を処理できる心理的構造を作り上げる機会を奪われるという。ただし、自己対象の共感的反応は完璧でなくてもよい<sup>1</sup>。コフト (Kohut, 1977/1995, p.68) は、心理的環境が、歪曲されていない共感によって精一杯子どもに反応するなら、深刻な欲求不満でさえ、心理的には有害としないと推測している。

「自己対象の成熟した心的構造との共感的融合」と「自己対象による欲求-満足の実行」という2段階の原則は、分析者の被分析者への態度の基盤ともなる (Kohut, 1977/1995, p.69)。被分析者はまず、自分が理解されたということに気づく必要がある。コフト (Kohut, 1984/1995, p.104) によると、精神分析による治療が可能となるためには、被分析者は自己対象転移とよばれる内的経験を動員することによって、分析者を自己対象とすることができなくてはならない。子ども時代に自己と自己対象との関係の領域で成熟への発達を阻止され、蒼古的な様式の自己愛関係に束縛されてきた被分析者は、分析者を自己対象として (自己対象転移が起こり)、その共感的共鳴を呼び起こし、それにより支えられていくのである (Kohut, 1984/1995, p.97)。この段階を治療過程における理解段階という<sup>2</sup>。

コフト (Kohut, 1984/1995, p.259) はさらに、精神分析的治療に向けての治療過程の進展は、正常な子ども時代の成熟段階—人生早期には完成されなかったものの、分析過程によって遅まきながらある程度の完成へと至ることのある段階—を本質的に繰り返すと述べている。赤ん坊のとき、母親によって持ち上げられ、全能な自己対象の一部として自分を感じた子どもは、初めて母親から離れて歩いていくとき、振り返って母親の顔を見ることで母親との結びつきを維持しようと試みるだろう。子どもが情緒的に健康な自己対象環境に取りまかれた、情緒的に健康な子どもであるなら、そうするのは、自分の素晴らしい達成に対して母親の誇りに満ちた微笑という確信的な反響を得るためである。自己対象から次第に距離を取る子どもの体験、とりわけ「自己対象環境との身体的な融合」を「自己対象との共感的共鳴」という結びつきで置き換えることができるようになる子どもの発達能力と類似したものが、分析の中にも存在している。それが確立されるのは、治療の段階が理解段階から、次第に説明段階を強調する方向へと動いていくときである。説明段階では、分析者は力動的発生論的洞察を患者に伝えることによって、患者が自分自身と自分の問題に対してより客観的になることを可能にするが、分析者は自己対象機能を維持し続け、患者と分析者との間の共感的結合は保持され、深められる。それまでの自己対象経験が、自己対象の側が共感的に共鳴するという、成熟した自己対象経験に置き換わるのである (Kohut,

1984/1995, p.257-258)<sup>3</sup>。コフォートは、(1) 親の共感が幼い子どもの安定した自己と自己評価の発達に重要な役割を果たすことと、(2) 特に自己受容の障害や自己の断片化の経験が中心的役割を果たす自己愛障害のような障害を抱えた患者の治療過程で、分析者が患者の自己対象となって、患者によりそって深く共感し、理解したことを説明することが、症状の治癒と患者の心的成長につながることを述べたとと言える。

ロジャーズの共感や治療についての考え方は、コフォートと類似していることが指摘されている(安村, 2016)。ロジャーズ(Rogers, 1975)は、共感(empathy)を、「他者の私的な知覚世界の中に入り、完全にくつろいで、他者の中に流れている意味の変化や、彼自身もほとんど気づいていない意味を感じ取り、その理解を他者に伝え、受け取った反応によって理解が正確かどうか点検し、確認していくことだ」と述べた。ロジャーズの共感の概念は、Einfühlung—empathyの伝統に沿っているが、臨床経験をもとにそれをさらに深めたものと言える。

ロジャーズ(Rogers, 1951 保坂他訳 2005; 1959 酒井他訳 1966)は、臨床経験とさまざまな文献研究、実証研究をもとに、子どもの自己概念とパーソナリティの発達についての理論を述べた。ロジャーズ(Rogers, 1951/2005, p. 331-332)によると、子どもに「私は……を経験する」という意識の兆しが現れると同時に、「私は……が好き」「……は嫌い」という意識も生まれてくる。子どもは最初、自分を増進するものと認知する体験を価値づけ、自分を脅かし自分の維持や増進に役立たない体験には否定的な価値を付与するが、その後、他者から自己への評価がこの像の中に入り込む。両親や他の人々からの「あなたは良い子ね」「おまえは悪い子だ」といった評価は、その子どもの認知の場において、大きく重要な一部となっていく。通常の子どもの自己経験にとって、最初の最も重要な側面の一つは、子どもがその両親に愛されることである。すると、子どもは自分自身を愛すべき、愛されるに値するものと認知し、両親との関係を愛情に満ちたものと認知する。このような時期、子どもは別の仕方、肯定的な知覚的価値を体験し、自己の増進を経験する。たとえば、弟や妹を叩いたり追い払ったりすることは、満足のいくことであり、刺激的なものである。しかし、これらの満足していた行動に対して、両親から「お前は悪い子で、そういう行動はよくない行動なので、そんなことをするときにはお前は愛されないし、愛するに値しない」というメッセージを受ける(愛情の付与に価値の条件<sup>4</sup>が加えられる)と、それは、形成され始めた自己の構造にとって深刻な脅威となり、体験された満足を意識することを否認したり、歪曲された象徴化が行われたりする。生命体が重要な知覚的・直観的な体験に気づくことを否認し、その結果、そうした体験が象徴化されずに、自己構造の中に組織化されないとき、心理的緊張が生じ、心理的不適応が生じることになる(Rogers, 1951/2005, p. 332, 340-341; 1959/1966, p. 235-236)。一方、親が、子どもが経験した満足感を純粹に受容し、そうした満足感を体験する子どもを十分受容すると同時に、そうした行動は我が家では受け入れられないという親としての自分の感情を受容することができると、子どもは愛される人間としての自分自身についての概念に脅威を経験することはない。子どもは弟に向けられた自分の攻撃的な感情を十分に体験し、それを自分の一部として自分の中に受容することができる(Rogers, 1951/2005, p. 334)。

しかし、自己の構造に一致せず、否認されたり歪曲されたりしてしまった体験があるとしても、自己にとってどんな脅威もないような一定の条件のもとでは、こうした自己の構造と一致しない体験は次第に認知され、検討されるようになり、自己の構造はこうした体験を受け入れて包含するように修正されていくとされる(Rogers, 1951/2005, p. 346)。ある重要な関係を持った人からの無条件のポジティブな関心が、共感的理解の下で伝達されることは、この条件を達成する一つ

の道である (Rogers, 1959/1966, p. 243)。このような無条件のポジティブな関心を知覚すると、それまでであった価値の条件は弱められるか解消し、自分自身への無条件のポジティブな関心が増加し、脅威は減少し、習慣的に脅威となっていた経験は象徴化されて、自己概念の中に統合されていくというのである。

ロジャーズ (Rogers, 1959/1966, p. 208-209) は、治療過程が起こるための条件として次の6条件を挙げた。(1) 二人の人が接触している。(2) クライアントと呼ばれる一方の人は(自己概念と経験が) 不一致か傷つきやすいか不安の状態にある。(3) 治療者と呼ばれる人は一致している状態にある。(4) 治療者はクライアントに対して無条件のポジティブな関心(肯定的配慮)を経験している。(5) 治療者はクライアントの内的枠組み<sup>5</sup>に共感的理解を経験し、その経験をクライアントに伝えようとしている。(6) クライアントは治療者の無条件のポジティブな関心と共感的理解を少なくとも最小限度知覚している。ロジャーズ (Rogers, 1959/1966, p. 214-223) によると、前述の条件が継続的に満たされると、治療過程の中で、次のような変化が起こる。すなわち、クライアントは次第に自由に自分の経験と自己概念の間の不一致に関する感情を表現するようになり、クライアントの自己概念は、以前には意識することを拒否してきたり歪めて意識したりしてきた経験を同化し、取り入れるように再組織されていく。そして、心理的適応は改善され、クライアントは他人を正確に知覚するようになり、他人に対して受容を経験するようになる。こうした変化が起こることは、実証的な研究でもある程度支持されたという。

心理療法における治療の効果を検討する研究や、ロジャーズが挙げた条件の効果を検討する研究は多数行われた。トゥルアックスとカーカフ (Truax & Carkhuff, 1967; Carkhuff, 1969) は、上記の条件の内容についてさらに検討し、無条件の肯定的配慮よりもむしろ非所有的温かさ、一致よりもむしろ純粋さ(防衛や偽善の少なさ)がクライアントのポジティブな変化に関連していることを見出し、非所有的温かさ尺度と純粋さ尺度と正確な共感(共感的理解)尺度、およびクライアントの自己探索の深さを測定する尺度<sup>6</sup>等を開発し、これらの条件の効果を検討した。それによると、心理療法は患者のパーソナリティの発達と変化を促進する場合もあるが、逆に悪化させてしまう場合もある。そして、患者にポジティブな変化をもたらすセラピストは、概して非所有的温かさと純粋さと正確な共感の得点が高い傾向にあったという。トゥルアックスとカーカフ (Truax & Carkhuff, 1967; Carkhuff, 1969) はこれらの尺度を用いた共感訓練法も開発した。これらの尺度を用いた共感訓練は教育、医学などさまざまな分野でその後も行われた(登張, 2021b)。教師の共感訓練研究 (Aspy, Roebuck, & Aspy, 1984) では、教師の共感を含む対人スキルは訓練できること、教師の対人機能は生徒の成績や自己概念の向上、出席の増加と正の関連を示したことが報告された。

共感的理解は、親子関係でもセラピストとクライアントとの関係でも、その他の人間関係でも重要な役割を果たし、ヒトの発達にプラスの影響を与える重要要因であることが示唆された。

## 共感がヒトの発達に果たす役割についての発達心理学における研究

発達心理学や社会心理学等の分野では、共感 (empathy) は「他者の感情反応に対する代理的的感情反応」というように定義されることが多い。この定義は、臨床心理学における共感 (empathy) の定義とは異なり、それまで道徳哲学や社会心理学などの分野で用いられてきた sympathy という用語の意味と類似している。sympathy は 18 世紀の道徳哲学者ヒューム (Hume, 1740 土岐

訳 1968) とスミス (Smith, 1759 水田訳 2003) が「つらい感情体験をしている他者の気持ちを想像し、気持ちを共有する現象」として言及した概念で、創成期の心理学でも用いられるようになり、特に社会心理学の分野では、1950年代まで共感を表す用語として用いられた。しかし1960年代以降、empathy の概念が sympathy 概念の内容も取り込み、認知的側面と感情的側面を持つ多様な意味を持つ概念となり、社会心理学や発達心理学等の分野でも広く使われるようになった。こうした変化が起きたのは、1950年頃、empathy 尺度<sup>7</sup>が開発され、臨床心理学でも臨床心理学以外の心理学の分野でも話題になり、その後さまざまな empathy の測度が開発されたことや、empathy 概念をむしろ sympathy 概念に近い含意で用いる理論家<sup>8</sup>がいたことなどが関連しているかもしれない。最新の神経科学的共感研究の分野では、共感 (empathy) の概念は (1) 他者との感情共有 (2) 他者の感情理解 (3) 他者への思いやりの3つを含むことが多いと指摘されている (Decety & Svetrova, 2012; Zaki & Ochsner, 2012)。発達心理学や社会心理学における共感も、この3要素を含む概念として捉えることができそうである。

ここでは、共感がヒトの発達に果たす役割についての発達心理学の分野における理論と研究を紹介する。発達心理学者のフェッシュバック (Feshbach, 1987) は、empathy を代理的感情反応と定義し、親の共感性と子どもの適応について扱う発達心理学の文献 (Maccoby & Martin, 1983 など) や、心理療法や対人関係、親子関係における共感の重要性を指摘した臨床の理論 (Rogers, 1951; Kohut, 1977 など) に基づいて、次のような研究を行った。子を虐待する親と被虐待児 26 組、ハイリスクだが虐待はない親子 25 組、健常な親子 66 組 (統制群) (子どもは未就学児) を対象に、課題を含む親子の相互作用を観察し、課題をしているときの子どもの母親に従う従順能力と、自己統制できる能力を測定し、母親の子どもへのかかわりを評定した。母親があらかじめ答えていた共感性 (Partner/Parent empathy) 尺度の得点を3群で比較すると、虐待群の母親の共感性は、他の2群よりも低かった。また、母親の共感性は、子どもの自己統制得点と正の関係を示し、母親の子どもへの関与、子どものポジティブ感情と正の相関を、子どものネガティブ感情と負の相関を示した。フェッシュバックはさらに、小学生時期の子どもの母親と父親に共感性尺度と問題行動のリストへの記入を求め、親の共感性と子どもの不適応の指標との関係を検討した。それによると、母親の共感性は子どもの外在化問題と内在化問題と負の相関を示し、父親の共感性は子どもの外在化問題とのみ負の相関を示した (Feshbach, 1987)。

親の共感性が子どもの発達に与える影響については、社会化理論でも扱っている。ブーゲンタールとグルセック (Bugental & Grusec, 2006) は、進化心理学に基づいて社会化をいくつかの領域に分けて捉える社会化の領域理論を提唱した。グルセックとダヴィドフ (Grusec & Davidov, 2010) は、この社会化の領域理論 (Bugental & Grusec, 2006) のほか、強化理論、養育スタイル、観察学習、アタッチメント理論、互惠的コンプライアンス理論、足場造り理論等に基づいて、5つの社会化領域を提案した。(1) 保護 (Protection) 領域と、(2) 互惠性 (Reciprocity) 領域、(3) コントロール (Control) 領域、(4) 誘導学習 (Guided Learning) 領域、(5) 集団参加 (Group Participation) 領域の5つである。これらの領域はそれぞれ独自の調査の歴史を持つとともに、異なる条件のもとに活性化され、異なる親子関係を含み、異なる養育反応を必要とし、異なる社会化の結果と関連している (Grusec, 2011)。このうち、共感性との関連が特に深いのは、誕生直後から重要となる保護領域と、乳児期から重要となる互惠性領域の二つである。

多くの種は、子が危険の中にあり、保護を必要とするとき、養育者のそばにいるよう進化してきた (Grusec & Davidov, 2010)。保護領域は、子どもが傷ついたり、病気になったり、身体的

危険に瀕したり、情緒的に動揺したりするときに活性化される。その活性化は誕生の時から始まり、子どもは援助と支援を求め、親はそれを与えるように導く。このような条件の下で、うまくいく養育とは、安全な環境とともに、子どもの苦痛への適切な援助や情緒的支援を提供する養育である。養育者が子どもの保護欲求に敏感に応答するとき、子どもは安全の感覚を発達させ、必要なときに養育者を頼ることができるようになる。子どもの苦痛への敏感な対応と養育や援助は、親の子どもへの共感的関心と子どもの苦痛や状態の理解を表していると考えられる。

親の適切な保護の重要な結果の一つは、子どもがストレスに適切に反応することと、苦痛を自己制御する能力を発達させることである。多くの研究は、子どもの苦痛に対して、なだめたり慰めたり、苦痛の源を取り除いたりすることによって反応してくれる親の子どもは、養育者に対して安定した愛着を持つようになることを示している (Grusec, 2011)。この安定した愛着は、ネガティブ感情の制御、ストレスに対処する能力、他者の苦痛への共感的関心など、さまざまなポジティブな社会化の結果を予測する。また、よく保護された子どもは、自分自身の共感的喚起を制御でき、他者の苦痛に焦点を合わせることができるので、他者の苦痛に対して共感的に反応できるようになる。さらに、支援的で安心させる養育者の指示や命令は、子どもを従順な行動に導きやすいとも指摘されている (Grusec & Davidov, 2010)。また、養育者が子どもを慰めるとき、向社会的で思いやりのある実践のモデルを提供しており、子どもの効果的なコーピング方略獲得の足場造りをしている可能性がある (Grusec & Davidov, 2010)。

ダヴィドフとグルセック (Davidov & Grusec, 2006) は、6-8歳の児童とその親を対象として、子どもの苦痛に対する母親と父親の反応の効果を検討する研究を行った。それによると、複数の測度で測定した子どもの苦痛への親の反応 (共感性を含む) は、母親が評定した子どもの感情制御と、複数の測度で測定した子どもの共感性と向社会的行動を予測した。

互惠性の領域は、親と子がたとえば遊びの中で、対等な地位のパートナーとして相互作用し、互いの望みを順応させるときに生じる (Grusec & Davidov, 2010)。互惠性は、具体的な好意のやり取りや無条件の相互性の形を取るが、そうしたやりとりは生き残りや生殖の成功に役立ち、進化的にも意味がある。互惠性領域では、養育者は子どもの道理のある要求と注意の企てに協力することによって、養育者は子どもがお返しとして協調するという条件を作り出している。親が進んで合わせてくれることに対して子どもが返礼し、親子は調子を合わせ、互いの要求に応答するのである。そうした相互の調律は相互作用の両方のパートナーにとって極めて楽しいので、この互惠的相互作用はポジティブ感情を共有しやりとりするという特徴を持つことが多い。この領域の結果として、子どもは親の要求に熱心に従うようになるという。

コッチャンスカ (Kochanska, 1997) は、健常児とその母親 103 組の相互作用を、2 度にわたっていくつかの文脈 (台所で一緒にお菓子を作るなど) で観察した。子どもの月齢は、Time 1 で 26-41 か月、Time 2 で 43-56 か月だった。相互作用のビデオテープを見て、母親の子どもへの反応を複数の方法で評定するとともに、子どもの母親への反応と、母子が共有するポジティブ感情についても評定し、これらの測度を総計して標準化し、Time 1 と Time 2 の「観察された全般的応答的志向得点」を作った。母親の作った規則を子どもが内在化する程度を測定する 4 種類の測度も作成された。それによると、観察された相互の応答的志向が Time 1 で高かったペアの子どもは、Time 2 ではすべての内在化得点が高かった。また、ガードナー他 (Gardner, Ward, Burton, & Wilson, 2003) は、主に社会的に不利な地域に住む 60 名の児童 (平均月齢 37 か月) を対象に縦断研究を行った。3 歳時に 3 回、4 歳時に 2 回、家庭を訪問し、面接や質問紙調査、



親子の相互作用の観察とコーディング、子どもの行為問題や多動性の測定を行った。それによると、3歳時に親子が共同遊び（協調的な遊びや作業）で過ごした時間は、4歳児の行為問題の少なさを予測し、共同遊びの頻度の多さは、子どもの問題行動の減少を予測した。親子の相互応答性や楽しい時間の共有、協調的な遊びや作業は、親子の共感や感情の共有を含んでいる。親子の共感を含むこうした活動は、子どもの発達にポジティブな影響を与えることが明らかとなった。

親の養育は、応答性や統制性（要求性）といった次元で扱われることが多い（Maccoby & Martin, 1983；中道・中澤など）。登張・名尾・田村・大山・首藤（2018a）は、そうした研究をもとに応答・共有尺度と統制・要求尺度からなる子育てスタイル尺度を作成し、親評定による子どもの協調性等との関係を検討した（登張・名尾・田村・首藤・大山, 2018b, 2019）。それによると、共感性との関連が深いと考えられる親の応答・共有は、保育園児、幼稚園児、小学校低学年、高学年児童の協力的志向と協調的問題解決傾向、小学生の役割取得、他者への配慮、規則遵守、親和性と有意な関連を示し、親の共感性は子どものさまざまな特性にポジティブな影響を与えることがここでも示唆された。

この節では、親の共感が子どもの発達に及ぼす影響について見てきたが、これまでの研究から、共感性のうち特に共感的関心と認知的共感性は、向社会的行動や社会的スキル、協調性などと正の関係にあり、外顕性攻撃やエゴイズムと負の関係を持つことなどが指摘されている（登張, 2021b；登張・首藤・大山・名尾, 2019）。個人が身に付けた共感性は、ポジティブな意味を持つ自分自身の特性や行動傾向を促進し、ネガティブな行動傾向を低減する可能性がある。共感性はその人自身の発達にもプラスの影響を与えることが多いと考えられる。

## 全体的考察

同一視にはさまざまな様相があるが、「親など重要他者のようになりたいと思い、同じようにふるまったり、その内面を内在化したりすること」と定義される同一視は、概してヒトの内面の成長や発達を促しうるものである。しかし、対象やその在り方によっては必ずしもヒトの発達にプラスの影響を与えるとは限らないことが指摘された。発達初期の融合的な同一視も、その後の発達の基盤となるもので、重要な役割を果たすと考えられるが、この形態の同一視も、子どもの発達にマイナスの影響を与える場合があると推測される。

共感については、コフォートの理論でも、ロジャーズの理論でも、社会化の理論でも、親の共感 は幼児期の子どもの発達に大きな影響を及ぼすことを指摘している。コフォートの共感 は、同一視を含む共感的共鳴と理解であり、応答や支援を伴うもので、ロジャーズの共感もそれと類似している。コフォートやロジャーズが捉える共感 は、発達心理学や社会心理学における共感よりも心の深層の深いものを含んでいるが、前述した共感の3要素（感情の共有と理解と他者への思いやり）も含んでいる可能性がある。

社会化の理論では、子どもの苦痛や保護欲求への応答的共感と、親子の間での楽しい活動や感情の共有が重視され、それらが子どもの感情制御や共感性、向社会的行動、規則の内面化、問題行動の少なさなど、さまざまなポジティブな能力の発達にプラスの影響を与えることが実証的研究でも概ね支持された。フェッシュバックの研究からも、共感性の高い親の子どもは、概して機嫌がよく、自分をコントロールでき、攻撃的行動や社会的孤立や抑うつなど、不適応の徴候が少ないことが示された。また、共感性との関連が深いと考えられる親の応答・共有尺度を用いた研

究からは、親の応答・共有傾向は子どもの協調性、役割取得等、さまざまな特性にポジティブな影響を与えることが示唆された。親の共感が発達早期や児童期の子どもの発達にポジティブな影響を与えることが、これらの実証的研究でも確かめられた。

発達早期に共感的環境を得られなかった子どもは、健全な自己愛や自尊心を持つことができなかつたり、自分の不安を上手に処理できる能力を持てなかつたり、生命体としての自分の体験の一部を認められず否認したり歪曲させたりすることによって、不適応に陥りやすい。しかし、そうした体験をした人も、心理療法の場で治療者に親の代わりに自己対象になってもらったり、共感的共鳴と理解を伝えてもらったり、どんな脅威もないような安全で受容的な条件を提供してもらったりすると、幼児期には得られなかった自己愛と安定した自己評価を得られるようになったり、それまで気づけなかつたり否認したりしていた自分自身の感情や体験に気づいて心理的適応を得ることができたり、さらには他者の受容もできるようになったりすることが、コフトやロジャーズの理論によって示唆された。心理療法やカウンセリングの場合は、不適応症状を低減するだけでなく、発達早期に不十分だった共感的環境を提供し、患者やクライアントのパーソナリティの健全な発達と変化を促しうるものでもあることが示唆されたのである。

フェッシュバックの研究からは、虐待傾向があるなど、共感性の低い親の子どもは、不適応パターンを発展させがちであることが示された。子どもの不適応の発生過程は、コフトやロジャーズの理論で示された過程だけではないと考えられる。被虐待児は、出生直後から安全と支援の環境を与えられていない。ロジャーズ (Rogers, 1951/2005) は、「子どもは最初、自分を増進するものと認知する体験を価値づけ、自分を脅かし自分の維持や増進に役立たない体験には否定的な価値を付与するが、その後、他者から自己への評価がこの像の中に入り込む」と述べたが、「自分を増進するものと認知する体験を価値づける」という経験がいろいろな理由でそもそもできなかった子どももいるに違いない。そうした初期体験を持つ人にはクライアント中心療法だけでは、得られなかったものの回復は難しいのかもしれないが、周囲の人々の共感的関心や理解と根気強い支援は、そうした人々の力となり、そうした人々の心の健全な成長につながりうると考えられる。ロジャーズは治療過程が起こるための6条件がクライアント中心療法だけでなく、他の心理療法にも共通する基本的な要素と考えたが、問題に責任を感じておらず、他人事のようにみているクライアントの場合にはうまくいかない傾向にあることが指摘されたという (阿部, 1966)。統合失調症の患者にはそうした傾向があり、治療が難しいが、根気強い取り組みが行われたようである。実証的な研究では、親の共感が子どもの発達にプラスの影響を与えるとともに、個人が身に付けた共感性も自分自身のポジティブな特性や態度の発達にプラスの影響を与えることが示唆された。共感とは複合的な意味を持つ概念だが、共感的関心や認知的共感性は概して、ヒトの発達に良い影響を与えるようである。パーソナリティの建設的な変化にとって重要なのは、共感的理解と非所有的温かさとは純粋さ (偽りのなさ) であるとされた (Truax & Carkhuff, 1967)。ヒトの発達を促す重要な要因となるのは、非所有的温かさとは純粋さを伴う共感的理解であるのかもしれない。

どのような共感でも、何らかの意味の同一視が含まれていることが示唆されている (登張, 2121a)。同一視は基本的に無意識のメカニズムであり、共感も無意識のメカニズムを含んでいる。ヒトの発達には、こうした意識化しにくい心的メカニズムも重要な役割を果たしていると言えるのではないだろうか。

## 引用文献

- 阿部八郎 (1966) ローリアズの最近の傾向—とくに精神分裂病へのアプローチについて— 畠瀬稔・阿部八郎 (編) 来談者中心療法—その発展と現状— 東京: 岩崎書店 pp.373-408.
- Aspy, D., Roebuck, F. & Aspy, C. B. (1984) Tomorrow's resources are in today's classroom. *The Personnel and Guidance Journal*, 62(8), 455-459.
- Benedek, T. (1959) Parenthood as a developmental phase. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 7, 389-417.
- Bugental, D. B. & Grusec, J. E. (2006) Socialization processes. In N. Eisenberg, W. Damon, & R. M. Lerner (Eds.) *Handbook of Child Psychology: 6<sup>th</sup> ed. Vol. 3, Social, Emotional, and Personality Development.*, New York: Wiley. pp.366-428.
- Carkhuff, R. R. (1969) *Helping and human relations*. Volume 1, 2. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Davidov, M. & Grusec, J. E. (2006) Untangling the links of parental responsiveness to distress and warmth to child outcomes. *Child Development*, 77, 44-58.
- Decety, J. & Svetlova, M. (2012) Putting together phylogenetic and ontogenetic perspectives on empathy. *Developmental Cognitive Neuroscience*, 2, 1-24.
- Dymond, R. F. (1949) A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 13, 127-143.
- Feshbach, N. D. (1987) Parental empathy and child adjustment/maladjustment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.) *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press. pp.271-291.
- Freud, S. (1921) *Massenpsychologie und Ich-Analyse: Group psychology and analysis of the ego*. Standard Edition, 18. London: Hogarth Press. (フロイト, S. 小此木啓吾 (訳) (1970) 集団心理学と自我の分析 フロイト著作集 6 京都: 人文書院 pp.195-253.)
- Gardner, F., Ward, S., Burton, J., & Wilson, C. (2003) The role of mother-child joint play in the early development of children's conduct problems: A longitudinal observational study. *Social Development*, 12, 361-378.
- Grusec, J. E. (2011) Socialization processes in the family: Social and emotional development. *Annual Review of Psychology*, 62, 243-269.
- Grusec, J. E. & Davidov, M. (2010) Integrating different perspectives on socialization theory and research: A domain-specific approach. *Child Development*, 81, 687-709.
- Hume, D. (1740) *Treatise of human nature*. London: Longman. (ヒューム, D. 土岐邦夫 (訳) 1968 人生論 大槻春彦 (編) 世界の名著 27 ロック・ヒューム 中央公論社 pp.403-532.)
- Kochanska, G. (1997) Mutually responsive orientation between mothers and their young children: Implications for early socialization. *Child Development*, 68, 94-112.
- Kohut, H. (1971) *The analysis of the self. A systematic approach to the psychoanalytic treatment of narcissistic personality disorders*. Madison, Connecticut: International Universities Press. (コフォート, H. 水野信義・笠原嘉 (監訳) (1994) 自己の分析 東京: みすず書房)
- Kohut, H. (1977) *The restoration of the self*. Madison, Connecticut: International Universities Press. (コフォート, H. 本城秀次・笠原嘉 (監訳) (1995) 自己の修復 東京: みすず書房)
- Kohut, H. (1984) *How does analysis cure?* Chicago: The University of Chicago Press. (コフォート, H. 本城秀次・笠原嘉 (監訳) (1995) 自己の治癒 東京: みすず書房)
- Kurtz, R. R. & Grummon, D. L. (1972) Different approaches to the measurement of therapist empathy and their relationship to therapy outcomes. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 39, 106-115.
- Lipps, T. (1909) *Leitfaden der Psychologie* (dritte, teilweise ungearbeitete Auflage). (リップス, T. 大脇儀一 (訳) (1939) 心理学概論 岩波書店)
- Maccoby, E. E. & Martin, J. A. (1983) Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.) *Handbook of child psychology*. 4<sup>th</sup> ed. Vol.4. New York: Wiley. pp. 1-102
- 溝口侑・溝上慎一 (2020) 大学生のキャリア発達とロールモデルタイプの関係—ロールモデル尺度 (RMS) の開発の試み— 青年心理学研究, 32 (1), 17-36.
- 溝口侑・溝上慎一 (2021) キャリア発達におけるロールモデルに関する研究の今後の課題と展開—坂井敬子氏のコメントに対するリプライ— 青年心理学研究, 33, 69-73.
- 中道圭人・中澤潤 (2003) 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 173-179.

- Rogers, C. R. (1951) *Client-centered therapy*. Boston: Houghton Mifflin Company. (ロジャーズ, C.R. 保坂亨・諸富祥彦・末武康弘 (訳) (2005) クライアント中心療法 東京: 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1959) A theory, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A study of a science, Vol. 3, Formulations of the person and the social context*. New York: McGraw-Hill, p. 184-256. (ロージャズ, C. R. (1966) 酒井汀・鏑幹八郎・西園寺二郎・村山正治・二橋茂樹・藤本文朗・西村州衛男 (訳) クライアント中心療法の立場から発展した治療、パーソナリティおよび人間関係についての理論 畠瀬稔・阿部八郎編訳 来談者中心療法—その発展と現状— 東京: 岩崎書店 pp.157-290.)
- Rogers, C. R. (1975) Empathic: Unappreciated way of being. *Counseling Psychologist*, 5, 2-10.
- Smith, A. (1759) *The theory of moral sentiments*. Oxford: Clarendon Press. (スミス, A. 水野洋 (訳) (2003) 東京: 道徳感情論 岩波書店)
- Sullivan, H. S. (1953) *Interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. (サリヴァン, H. S. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑幹八郎 (訳) (1990) 精神医学は対人関係論である 東京: みすず書房)
- Titchener, E. B. (1909) *Lectures on the experimental psychology of thought process*. New York: Macmillan.
- 登張真穂 (2021a) 同一視と共感との関連性 文教大学生生活科学研究, 43, 111-123.
- 登張真穂 (2021b) 共感性 小塩真司編著 非認知能力 概念・測定と教育の可能性 京都: 北大路書房 pp.163-180.
- 登張真穂・名尾典子・田村沙織・大山智子 (2018a) 親評定による多面的に捉えた児童の協調性と親の子育てスタイルとの関係 文教大学人間科学研究, 39, 185-195.
- 登張真穂・名尾典子・田村沙織・首藤敏元・大山智子 (2018b) 児童の役割取得、他者への配慮、規則遵守等と親の子育てスタイルとの関係—親評定尺度を用いた検討— 日本教育心理学会第 60 回総会 PA09
- 登張真穂・名尾典子・田村沙織・首藤敏元・大山智子 (2019) 保護者評定による保育園児と幼稚園児の協調性と親の子育てスタイル—小学生の保護者データとの比較— 文教大学人間科学研究, 40, 153-163.
- 登張真穂・首藤敏元・大山智子・名尾典子 (2019) 3 因子で捉える多面的協調性尺度の作成 心理学研究, 90, 167-177.
- Truax, C. B. & Carkhuff, R. R. (1967) *Toward effective counseling and psychotherapy*. Chicago: Aldine.
- 安村直己 (2016) 共感と自己愛の心理臨床 コフト理論から現代心理学まで 大阪: 創元社
- Zaki, J. & Ochsner, K. (2012) The neuroscience of empathy: progress, pitfalls and promise. *Nature Neuroscience*, 15, 675-680.

## 脚注

1. コフト (Kohut, 1971/1994, p.59) は、自己対象の反応が少し遅れるとか、子どもの欲求と少しずれているといった「適量の欲求不満」は、子どもの心の中に、母親の持つ機能を引き継いだ、自らをなだめる能力を持った微細な内部構造を成立させると述べた。
2. コフト (Kohut, 1984/1995, p.97-102) によると、分析の初期に生じる、分析者への自己対象転移によって供給される静かな支持基盤は、分析者の示す一時的で非外傷的な共感不全 (至適な失敗) によって繰り返し崩されるが、分析者が、自分の失敗のために生じた患者の引きこもりに気づき、自分の過ちを認め、患者にその引きこもりの力動について解釈を与えるということを繰り返すことによって、患者は新たな自己の構造を獲得し、自己評価を高めていくという。
3. コフト (Kohut, 1984/1995, p.113) によれば、精神分析的治療の本質は、患者が現実の環境の中で適切な (鏡映しかつ理想化する) 自己対象を探し出して同一化し、そうした自己対象によって支持される、という新たな能力を獲得することである。
4. 価値の条件 (conditions of worth) : ある重要な関係にある人からのポジティブな関心が条件づきのものであるとき、つまりその人がある点については尊重され、他の点では尊重されないことを感ずるようなときに生じる。価値の条件は評価の過程を乱すので、ヒトが自由に最高の効率で機能を発揮するのを妨げることになる (Rogers, 1959/1966, p.202-203)。
5. 内的枠組み (internal frame of reference) : ある時にその個人が意識の上で気づく可能性があるあらゆる領域の経験。意識に入ってくる可能性のある感覚、知覚、意味、記憶など。個人の主観的世界 (Rogers, 1959 /1966, p.204)。内的照合枠ともいう。

6. 非所有的温かさ尺度と純粹さ尺度と正確な共感（共感的理解）尺度、クライアントの自己探索の深さを測定する尺度：いずれも実際に行われた面接を録音し、評定者がセラピストの共感等を評定した（Kurtz & Grummon, 1972）。
7. ダイモンド（Dymond, 1949）は empathy を「他者の思考や感情や行為の中に自己を置き換えること」と定義し、そうした共感の正確さを測定する尺度を開発した。しかし、この尺度は方法論的問題を指摘され、その後用いられなくなった。
8. 臨床家のサリヴァン（Sullivan, 1953 中井・宮崎・高木・鐘訳 1990）は、「母親の不安が幼児の中に不安を誘導する」現象を empathy とよんだ。しかし、これは通例、情動感染とよばれる現象であり、empathy よりむしろ sympathy の概念に含めることが多い。サリヴァンは、応答的、支援的共感については、やさしさ（tenderness）という言葉を用いて述べている。